

ミュージシャン・坂本龍一さん 未知なる地平を求めて（2008年3月掲載）

人間発見 復刻版

2023/4/3 16:55 | 日本経済新聞 電子版



映画「戦場のメリークリスマス」「ラストエンペラー」などで知られるミュージシャンの坂本龍一さんが亡くなりました。2008年に日本経済新聞の夕刊に連載したコラム「人間発見」から音楽家としての原点や転機、エピソードを振り返ります（年齢は掲載当時）。

「人生には限り」年齢思う 「少しは努力を」と戒め

坂本龍一さん（56）は西洋と東洋、過去と未来を融合し、未知の地平を切り開いてきた。社会に向けて発言し、行動する音楽家でもある。

僕は要領がいいというか、処世術だけはうまいんです。何かあってもスルリと体をかわしてしまふ。でもサラリーマンでなくクリエイターですからね。ダメですよ、それでは。「努力したらすごいことができたのに」と人からよく言われます。

そもそも努力という言葉を知らないんです。譜面を書くのも好きじゃない。理由は手が疲れるから……。そんな音楽家がいいますかね。つくづく怠け者だなと思う。誘惑や欲望にすぐ負けてしまふ。人生計画がない。

ただ最近はずがに年齢のことを考えますよ。夏目漱石が亡くなったのが確か四十九歳でしょう。でも僕はそのかけらもモノになってない。人生には限りがある。「少しは努力しないと」なんて自戒してます。

ベルリンで自我崩壊 「何々っぽい」音楽に別離

2000年。ベルリンで「自我の崩壊」を体験する。

教会で開いたピアノコンサートでした。敬愛するブラームスをモデルに書いた「Intermezzo」という曲を演奏していた。「いい出来だ」と悦に入っていたら、演奏中に我に返った。

「あれ？ 何やってんだろう」って。ブラームスみたいな曲を、ブラームスの祖国で、日本人が得意げに弾いている。その滑稽（こっけい）さに今更ながら気付いた。恥ずかしいやら自己嫌悪やら……。

「音楽のお勉強」が続いていたんですね。分かっていたはずなのに。ショックでしばらく放心状態でした。自分は音楽的に"欧州語"を話している。でも単に「和」に回帰するだけではダメなんです。



音楽家の坂本龍一氏

例えば邦楽。僕にとっては西洋音楽以上に"外国語"だから回帰しようがない。勉強した言葉で勝負するしかない。そこが難しい。とにかく僕は「何々っぽい」音楽はやめようと改めて決意した。「坂本っぽい」音楽も含めて……。

06年に矢野顕子さんと離婚。ニューヨークで高校2年の息子とパートナーの家族3人で暮らす。

僕は過去に二度結婚し、二度離婚した。子どもは4人います。娘2人と息子2人。それぞれ親の組み合わせが違う。一番下の息子を除くと、上の3人とはあまり一緒に過ごせなかったですね。不公平なので3人に「ごめん」と謝りました。

末の息子は音楽にも絵にも興味があるようで、どの分野に進むかは分かりません。日本男児らしい気骨もあって、僕がヘラヘラしていると「しっかりしろ!」なんてよく怒られてます。

ニューヨーク暮らしは18年。街としてはつまらなくなりましたね。1980年代の爛熟（らんじゅく）が90年代から冷え込み、単なる金融センターになった。刺激がないから歩かない。完全な引きこもり生活です。

今、気になるのがハドソン川の水位。4、5年間、観察してきたが、温暖化の影響か水位が上がった気がする。先日、州と市からハリケーンが来た時の水没地域の地図が届いたので見たら、ウチは「水没ギリギリ」で慌てましたよ。

地下に楽器、コンピューター、音源データなどがありますから。早速、大型ハードディスクを買ってきて、大事な音源からせっせと保存し直しているところです。

幼稚園で音楽に出合う 作曲の授業で「ウサギのうた」

1952年、東京生まれ。父、一亀は三島由紀夫「仮面の告白」、野間宏「真空地帯」、高橋和巳「悲の器」など数々の名作を世に送り出した伝説の編集者だ。

河出書房の「文芸」編集長だった父は、外ではリベラルな人間と見られていたようですが、家ではいつも軍隊口調。九州男児で満州への出兵経験もあるので「ちゃんとせんか!」が口癖でした。もう怖くて、高校までまともに目を合わせたことがなかった。

戦時中の体験談は、興味を持って聞きました。満州で凍傷になり、突然、医者から「歯を食いしばれ」と言われ、麻酔なしでツメの先を切り取られたとか、野営で遠方のソ連兵の歌声が聞こえて肝を冷やしたとか、野犬に囲まれたとか……。

東京に珍しく雪が降ったある日、父から「表へ出ろ」と言われて木刀を手渡された。「かかってこい!」という。寒げいこですよ。「女々しい男にならないように根性を鍛えよう」と思ったんでしょう。

でもその反動からか、僕は欲望には逆らわない自然児に育った。母が天真爛漫（らんまん）なハイカラ娘だったから、その血が流れてるんでしょう。ただ裏方の仕事が好きなたたりは、やはり編集者だった父に似ているのかもしれないね。

幼稚園時代のピアノや作曲の授業で音楽に目覚める。

自宅にはピアノがなかった。だから、幼稚園でピアノに触れたのが音楽との最初の出合いです。印象的だったのは夏休みにウサギの世話をし、その体験をもとに作曲した授業。歌詞付きで「ウサギのうた」を作った。何かくすぐったいような、うれしいような不思議な感覚を覚えています。

叔父の家にもよく遊びに行きました。レコードやピアノがあって、音楽を聴かせてほしいとせがんだものです。小学校に入ると専門の先生の下でピアノや作曲を学び、そこでバッハやベートーベンを知った。小学5年ではビートルズに出会い、中学で衝撃を受けたのはドビュッシーだった。

「自分はドビュッシーの生まれ変わりだ」なんて半分、本気で信じてましたよ。鏡を見ながら「自分はなんで日本人なんだろう?」と不思議がっていたくらいですから。

留学帰りの塩崎氏と親友に ナマの米文化に触れる



小学生時代、軽井沢で父（右）と

高校時代、無二の親友となったのが米国帰りの塩崎恭久氏（元官房長官）だった。直輸入のヒッピー文化を吸収した。

彼とは小中高が一緒。ただ向こうが一年先輩です。育ちは良いし、勉強もできる。イケメンで足も速い。何でもできるスーパーマンですよ。でもツーンとした感じもあって、僕は反発とあこがれの入り交じった視線で彼を見てましたね。

中学では同じ吹奏楽部でした。彼は花形のトランペット。一方の僕は顧問の先生から「君、いい口してるね!」なんておだてられて、気付いたら裏方のチューバですよ。もうがっかり。新宿高校2年の時、その彼が1年間の米国留学を終え、僕のクラスに入ってきた。

鮮烈だったのが初日の英語の授業です。先生が英語スピーチを頼むと、彼はやさぐれた感じで話し始めた。もうペラペラでビックリ。悔しくて必死に耳を傾けたけど、一言も聞き取れなかった。後で彼と話してみたらエリート臭が抜けた「いいヤツ」になっていて、すぐ親友になりました。

彼の家に入り浸って、西海岸から持ち帰ったレコードを聴きまくった。彼を通じて僕はナマの米文化に触れたんです。ジャズ喫茶や映画に出掛けたり、文学書や哲学書について議論をしたり。デモにも出掛けました。

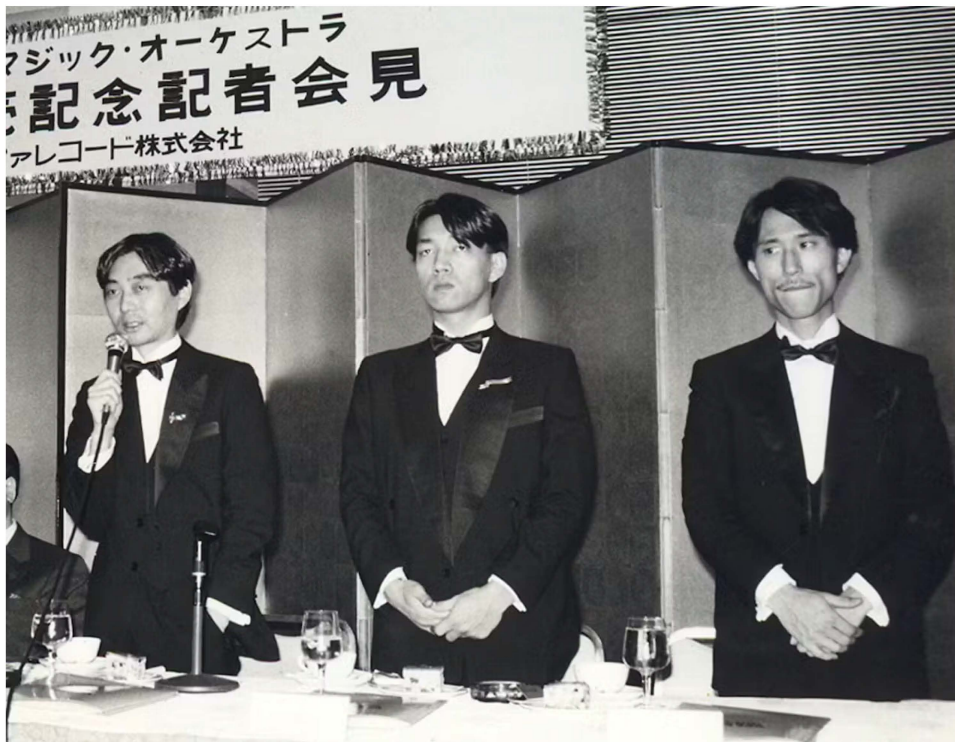
70年、東京芸術大学作曲科に現役で合格する。

実は高1の時に会いに行った作曲家の池辺晋一郎さんに「今、受験しても芸大作曲科に受かるよ」なんて太鼓判を押されてしまったんです。もう有頂天。遊ぶしかないと思った。何の保証もないのに楽天的なんです。

芸大受験の様子はよく覚えてます。実技は教室にこもって作曲するのですが、僕はさっさと課題を終えて、一番先に教室を出てしまった。嫌な感じでしょう。提出が早いからって成績がいいとは限らないのに。ただ昔から要領だけは良かったんです。

「人民のための音楽」に興味 「世界の武満」に論戦挑む

東京芸術大学作曲科に入学した坂本龍一さんは民族音楽や電子音楽にも関心を広げる。



アルバムの海外発売で会見するYMO（写真左から細野氏、本人、高橋氏）

バッハ、ベートーベン、ドビュッシーを経てロックや現代音楽へ——。まさに時代を過去から現代へ下っていくように音楽を勉強してきた。だがインド音楽やアラブ音楽にも西洋音楽には比較にならないくらい長い伝統や理論があると知り、「西洋音楽には先がない」と考え始めた。

誰でも楽しめる「人民のための音楽」に興味を持ったんです。ただ大学3年で芸大油絵科の年上女性と結婚して子どもが生まれたので、生活費も稼がないといけなくなった。バーでピアノを演奏したり、ライブやレコーディングを手伝ってみたり。スタジオミュージシャンの仕事もかじり始めました。

音楽家、武満徹氏に出会ったのはそんな時。雲の上の存在に論戦を挑んだ。

ある日、演劇関係の知人と酒を飲みながら音楽談議をしていたら「武満徹はけしからん。邦楽器なんか使い出して保守っばい」と盛り上がり、演奏会場で批判ピラを配ろうということになった。前衛でモダニストなのに「日本回帰」なんて許せないというわけです。

まあ好きな子に意地悪するような心境ですよ。2回目のピラ配りの際、武満さんがやってきて、「これ書いたの君？」と話しかけてきた。穏やかだが少し困ったような感じだった。武満さんは30分ほど真摯（しんし）に耳を傾けてくれた。

感激しましたね。世界的な音楽家と無名の学生ですよ。その誠実さに心を打たれた。結局、武満さんの答えは「自分は武満教の唯一の教祖であり信者」という信念。意見が違っても自分が信じる道を歩むという意味でしょうか。武満さんは僕にとって目指すべき指標のような存在でした。

YMO、世界に向け結成 日本背負う重圧実感

1976年に東京芸大大学院を修了。その2年後、音楽グループ「YMO（イエロー・マジック・オーケストラ）」が誕生する。

高橋幸宏君に出会ったのは、僕が山下達郎君のバンドでピアノを弾いていた時期です。場所は日比谷の野外音楽堂。彼はサディスティック・ミカ・バンドでドラムをたたいていた。とにかくおしゃれな格好に度肝を抜かれた。上から下まで「KENZO」で決め、首にはスカーフを巻いている。

こちらは高校時代からの蛭カラで長髪に汚いジーンズとゴム草履でしょう。人種がまったく違う。聞けば高校時代から青山通り辺りでダンパ（ダンスパーティー）なんかしていたらしい。僕らにすれば青山通りはデモで暴れ回るような場所だったから仰天ですよ。

YMOを立ち上げる話は細野晴臣さんから聞きました。78年冬。僕と幸宏君は細野宅に招かれたんです。和室のコタツにミカンとおにぎりが置いてあった。細野さんが大学ノートを開くと、爆発する富士山の絵と「イエロー・マジック・オーケストラ」という文字が目に入った。

「日本発で世界に向けたバンドをやりたい。一緒にどう？」というわけです。最高の荣誉ですよ。内心、うれしかった。でも当時はとんがってましたから「時間があるときならやってもいいっすよ」なんて生意気な態度を取ってました。

79年の海外公演を機にYMOは「テクノポップ」の旗手として世界的な旋風を巻き起こす。

東風、ライディーン、テクノポリス……。気が付けばすごい人気で戸惑いました。日本を背負う息苦しさも感じた。モード界でも三宅一生や山本耀司ら日本人デザイナーが一斉に世界に進出した時期です。彼らも同じように日本を背負う感覚があったのでしょうか。

思い出すのはロンドンのコンサート。格好いいカップルが突然、曲に合わせて踊り始めた。僕はそれを見ながら「こんな格好いい人を踊らせてる自分たちはなんて格好いいんだろう」と思った。欧米の音楽ビジネスの仕組みに触れたのもその後の財産になりました。

ただYMOについて父は怒ってましたね。赤い人民服なんか着てたから「そんなことするために音楽を勉強したのか」とひどくしかられました。

ツアーセット燃やし、YMO解散 自分の仕事に軸足

一世を風靡（ふうび）したYMOは結成5年目の1983年に"散開"（解散）する。



カンヌ映画祭でデヴィッド・ボウイ（左）と

最後にツアーのセットを海岸に運び、すべて燃やしました。演出家のアイデアです。「面白い」と僕らも乗った。最後の瞬間は特別な感慨はないですね。「終わったな。おやすみなさい」って感じ。もう自分の仕事に軸足を移す準備ができてましたからね。

3人とも疲れてたんですよ。ツアーに出ると一日中、顔付き合わせるわけですから、まさに刑務所が移動しているような感じ。みんな飽きっぽいし。毎日、同じメンバーで同じ曲を演奏するわけです。そりゃケンカになりますよね。雰囲気が悪くなってしまって……。

海外公演は2回しましたが、そこでストップしたことも僕には不満だった。「世界に出てくぞ」と始めたバンドですよ。なのに、どういうわけか国内ばかり。細野さんが言い出したことを、2人がやめちゃった夢を、僕一人がまだ不器用に続けてるという気がする。YMOの意志を継いだのは僕なんだと。

YMOの再結成ですか？ その可能性は否定も肯定もしません。だが3人の間では実際に再結成の話はしてますよ。ただし音楽抜きで。まず飯でも食おうかと……。3人の流れが合えば何かできるかもしれない。でも再び苦い思いもしたくはない。まあ、緩い感じでいければと思ってます。

YMO解散と同じ83年。映画「戦場のメリークリスマス」に出演し、音楽も担当した。

突然、面識もない大島渚監督から連絡があって「出演して」という。「音楽もできるなら引き受けましょう」と条件を出したら快諾してくれた。でも僕は役者も映画音楽も未経験。大島監督もいい度胸ですよ。古武士のような人だと思った。

ロケは南太平洋の小島とニュージーランド。演技はもう穴があったら入りたいくらい恥ずかしい思い出です。僕って滑舌が悪いでしょう。「英語は字幕があるから分かるけど、日本語のセリフは全然聞き取れない」と散々からかわれました。

共演したデヴィッド・ボウイと仲良くなり、撮影中に余興でセッションもしました。僕がドラムで彼がギターと歌です。「映画音楽も一緒にやろう」と誘ったけど、実現はしなかった。映画音楽には3カ月もかけることができました。参考にしたのは映画「市民ケーン」。音を入れる間合いなどを勉強した。

カンヌ映画祭はショックでしたね。下馬評も高かったし、僕らは「当然、グランプリだろう」と思って海岸でシャンパンなんか飲んでいた。そしたらグランプリは「楢山節考」でしょう。皆、絶句しました。山の頂上から谷底に突き落とされた感じ。監督を見ると、サムライのように怖い顔をして、現実を受け止めている様子でした。

映画「ラストエンペラー」に出演 突然の電話、作曲を担当

映画「ラストエンペラー」ではアカデミー賞作曲賞を受賞。世界的な名声を手に入れる。

ベルトルッチ監督に出会ったのは「戦メリ」を出品したカンヌ映画祭の会場です。すでに「ラストエンペラー」の構想を温めていたようで、初対面の僕にその筋書きを延々と語って聞かせる。他人の話はまったく聞かない人ですね。

それから3年ほどして突然、英国人プロデューサーから電話が入った。「来週、北京に来い!」。ラストエンペラーの撮影が始まるから役者として出演してくれという。「音楽は?」と気になったが、どうせ巨匠エンニオ・モリコーネがやるんだろうと思っていた。

撮影は楽しかったですね。ベルトルッチ監督は冗談ばかり言って周りを笑わせる。僕はいつも一緒に食事して笑ってました。でもシリアスな場面が近付いてきたら監督の顔付きが一変。僕は日本帝国軍人役なので「笑うな。アマテラスオオミカミ（天照大神）のことを考えろ!」なんて言われて面食らった。

撮影が終わって数カ月すると英国人プロデューサーからまた突然の電話です。「明日から音楽を作れ!」と言う。期限は2週間。もう寝る間も惜しんで作曲に没頭しました。監督は映像を頻繁に修正するから、音楽も作り直しが多くて大変だった。頭も身体もボロボロ。抜け殻のようになりました。

自宅で同時テロを目撃 血肉となっていた米文化に揺らぎ

1988年、「ラストエンペラー」でアカデミー賞を受賞した後、直面したのはハリウッドの"ムラ社会"だった。



ジョピン家でアルバムを収録

授賞式はお祭り騒ぎでした。この映画の仕事から離れて半年くらいたっていたから「忘れたころにやって来た突然の贈り物」みたいなものです。ただステージでトロフィーをもらった時には頭の中が真っ白。乱暴な英語であいさつしてしまい、恥ずかしい思いをした。

しばらくロスに滞在し、だれかの助言で映画会社のプロデューサーらお偉いさんのところにあいさつに回りました。「坂本龍一でごぜえやす」って感じで頭を下げに行った。すると全員から「いつロスに引っ越してくるの?」と言われる。ムラ社会ですね。

「ロスに来て、毎週パーティーに顔を出して社交しろ。そうしないと仕事はないよ」というわけです。でもそんなの僕には無理です。あり得ない。もしロスに移り住んでいたら、もっと違った人生を歩んでいたでしょうが、僕はハリウッドとは距離を置くことにした。

2001年9月11日。ニューヨークの自宅で米同時テロの惨劇を目撃する。

シュールな光景でしたね。七番街通りを南の方角に眺めると、見慣れた貿易センタービルに旅客機が突っ込み、モクモクと黒煙が上がっている。北に向かって逃げてくる群衆。これは事故なのか、事件なのか……。頭をめまぐるしく回転させながら、僕は夢中でカメラのシャッターを切った。

街は大混乱。僕のアイデンティティーも大きくぐらついた。ヒッピーとかロックとか、自分の血肉になっている米文化を否定しないといけな
いのかと思った。善悪という二元論で判断するアメリカ。「米帝」という学生運動でよく口にした懐かしい言葉が脳裏によみがえってきた。

この年、ボサノバの創始者、故アントニオ・カルロス・ジョビンにささげるアルバムを発表する。

僕にとってはジョビンは音楽の神様の一人です。ジョビンのバンドの主要メンバーとユニットを組んでいたから、いずれは会えると思っていたら、94年に亡くなってしまった。その6カ月後に自宅に招かれ、ジョビンが使っていた部屋を見た時には感動しました。

ドビュッシーやショパンの楽譜が無造作に置いてあるんです。「僕と同じ音楽を聞いていた」とうれしくなった。ジョビンのピアノにも恐る恐る触ってみた。白鍵に指の跡がはっきり残り、よく使う音域だけ茶色くなっている。そのピアノが何とも良い響きだった。

音楽は振動ですから毎日、同じ人が同じように弾いていると楽器もそれになじむ。ピアノの音が家全体に響いている感じがする。アルバムはジョビンの自宅で収録しました。そこで不思議なことが起きたんです。僕たちが最初の曲を録音していたら、一羽の鳥が舞い降りてピーと鳴いた。

「ジョビンだわ。きっと祝福してるのよ」。未亡人がこうつぶやいたので厳粛な気持ちになりました。音楽家にとってジョビンの家はまさに聖堂なんです。アルバムは「家」を意味する「CASA」と名付けました。

非戦、地雷廃絶、PSEマーク反対……。活動家としての動きも活発だ。

森林を手入れすると二酸化炭素（CO2）の吸収効率がよくなる。今から植林しても間に合わないほどCO2削減問題は急務です。そこで昨年七月、細野晴臣、高橋幸宏各氏に発起人になってもらい、「モア・トゥリーズ」という有限責任中間法人を設立した。国内外の森林のCO2吸収率を上げるために投資するプロジェクトです。

僕は音楽家ですから、90年代までは発言や行動はなるべく避けてきた。でも環境悪化があまりにひどいので動くことにした。皆に気付いてもらいたいと思って……。子どもの世代が苦勞すると分かっていたら、親として何かするのは当然でしょう。

でも皆が気付くようになったら僕は音楽だけに戻りたい。もともと怠け者ですから。それが良いと思ってます。

（聞き手は編集委員 小林明）